

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2015

課題番号：23730483

研究課題名(和文) 保育による地域への介入過程に関する社会学的研究 保育の「誕生」から全域化まで

研究課題名(英文) The Process of Intervention in Regions by Nurture

研究代表者

増田 仁 (MASUDA, Megumi)

熊本大学・教育学部・講師

研究者番号：80510560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：イギリスでの子どもの生活/労働状況に関する資料を収集した。戦後初期の主に東北農村の母親の生活状況を把握するため、生活改善普及事業等が行った、生活記録を収集した。高度経済成長期における家事労働者の形成過程に関する著書を刊行した。仙台での高度経済成長期以降の子どもの様子に関するインタビュー調査を3園の保育園園長に実施し、家族数、所得等の資料を収集した。現在の子育てネットワークがどのように形成されているかについて調査し、論文を執筆した。

研究成果の概要(英文)：In Britain, I collected materials about life and work conditions of children during the Industrial Revolution. For getting hold of living conditions of rural women mainly in the Tohoku region in the early postwar, I gathered life documents by movement for the improvement of living conditions. I published the book about the process of forming domestic labor during high growth period in Japan. In Sendai, I interviewed chiefs of three nursery schools about living conditions of children after high growth period in Japan. At the same time, I collected data about family structure and the income level. I investigated how to form the network about child care in modern Japan. After that I wrote academic paper.

研究分野：教育社会学

キーワード：保育の共同化 保育の歴史 保育と地域性

1. 研究開始当初の背景

近年教育社会学においては、教育による身体
の規律化過程を比較社会史の視点から分
析する研究が蓄積されつつある(望田幸男ほ
か『身体と医療の教育社会史』昭和堂 2003)。
本研究では、保育が幼児の身体をどのように
規律化し、地域住民の生活をどのように統御
しようとしていったのか比較社会的に実
証していく。また歴史学においては、教育の
受け手であり続けた民衆の視点から教育を
とらえ返すことの重要性が指摘されており、
日記や生活時間から教育機関が民衆の生活
世界へ与えた影響が分析されている(大門正
克『民衆の教育経験』青木書店 2000)。吉長
真子(「昭和戦前期における出産の変容と「母
性の教化」」『東京大学大学院教育学研究科紀
要』第 37 巻 1997pp.21-30)は昭和戦前期に
おける出産の「近代化」を進めるにあたって、
村の上層部と一般農家との間に意識上の隔
たりが大きかったことを指摘している。ジェ
ンダー論においては、19 世紀を中心にアメリ
カの都市部で、女性の家事労働を軽減するた
めに共同での家事労働実践が構想され、共同
の保育室等を備えた住居が建設され、生活が
営まれていた事実が掘りこされている(ドロ
レス・ハイデン『家事大革命』勁草書房 1985)。
家族社会学においては、日本における女性の
M 字型就労の解決手段として、保育制度の拡
充が重要な役割を果たすと指摘されている
(落合恵美子ほか「変容するアジア諸社会に
おける育児援助ネットワークとジェンダー」
広田照幸編『子育て・しつけ』日本図書セン
ター 2006pp.92-116)。以上の先行研究を踏ま
えながら、本研究では比較史的視点を踏まえ
ながら、共同保育が子ども観をどのように変
容させ、実際の子どもたちや地域生活者にど
のような影響を与えたのか、特に女性の生
活・労働へどのように関与していったのかを
明らかにしていく。

2. 研究の目的

本研究では、日本の地域社会において集団
保育がその誕生から現在まで、子どもや大人
の生活世界をどのように「合理化」させよう
とし、人々はどのように受け止め、時には読
み替え、自らの生活を保持あるいは変容させ
ていったのかを明らかにする。具体的には、
衛生教育や「標準」語の教え込みといった保
育実践の内容を、地域や家庭との相互影響関
係を視野に入れながら分析していく。とくに、
地域や家庭と保育現場との接触領域になっ
ていく子どもたちに焦点を当て、保育現場が
子どもへの教育を通してどのように地域や
家庭に介入し、生活を「合理化」させよう
としていったのか、そのプロセスを明らかにし
ていく。

3. 研究の方法

(1): 人々の生活の歴史を社会的に分析す
る歴史社会学や、一般大衆の歴史を分析の俎
上に載せる民衆史の研究成果を援用する。女
性と子育て、特に女性が子育てをしながら何
を考えていたのか、子どもはどう思っていた
のかを考察するためにジェンダー論を、子育
てという家族形成の視点から、家族の在り方
を問うために家族社会学の分析視角を取り
込んでいく。都市部、農村部の生活を社会学
の視点から分析するため、地域社会学の学問
的蓄積も参照する。社会学の理論としてネッ
トワーク論を活用し、関係性の中で人々がい
かに生活を営んでいくかを分析していく。

(2) 文献研究、具体的には生活記録、保育
所設置運動に関する資料、保育所数や世帯数、
所得等に関する統計資料、地方編纂史を収集
し、生活を営む者の視点から保育という社会
的行為を分析していく。さらにインタビュー
調査法を用い、文書に残ることの少ない、子
どもを中心とした人々の生活状況の変容を
掘りあげていく。

4. 研究成果

(1) 高度経済成長期の東北農村の子育て状
況

当該期における生活記録等の分析を行っ
た。生活費や教育費を得るために、父親が出
かせぎに行かざるを得ない現状の中、実質的
な母子家庭が増加していく。特に開墾農家の
困窮がひどかった。生産労働や子育てに追わ
れ、教養のための時間が取れない主婦の現状
から、生活改善グループなどで共同保育の動
きが生まれていたことが分かった。

(2) 高度経済成長期の仙台の保育状況

仙台は、戦争中、多くの文化人が東京から
疎開した地方都市であった。言論統制下にあ
って、自らの「思想」を直接的には表現しな
い傾向が強いため、児童文化が隆盛した。特

に、東北子ども文化研究会の活動は活発であった。学校教育や社会教育の現場において、生活綴り方運動も盛んだった。

保育園園長が回想する農繁期託児所での子どもたちの様子は、寺院の墓石で遊んだり、いたずらをするなど活発なものであった。子どものいいところを子ども同士がよくわかってきた時代だと園長は語っていた。

仙台市は性別分業意識が高く、主婦化の進行が全国平均より著しかった。また、核家族の割合も全国平均より高かった。

当該期に市の方針として保育所の設置が増加する中で、子どもは保育所に囲い込まれ、母親はパートタイマー労働者となっていった。転勤族や流入者が多く、母親の賃労働者化が進んでいく中で、家庭間の分断、ひいては子ども間の分断の問題が浮き彫りになっていった。

(3) 現代の子育てネットワークの形成について

東日本大震災以降の子育てネットワークがどのように形成されてきているのか、福島・関東・熊本でのインタビュー調査を行い論文にまとめた。福島県会津若松市に役場ごと避難してきた大熊町の人々は幼稚園や小学校を起点としながら、ネットワークを形成していた。地域に溶け込むにあたり、子どもたちが大きな役割を果たしていることが分かった。関東地方では、勤労女性を中心にママランチ会が催され、放射能のことなどが話題に上がり、インタビュー対象者は、この会で自分の立ち位置を確かめていたという。関東から熊本に母子避難してきた人々はNPO団体の援助を受けながら、職探しや子育てに関する情報を得ていた。

災害時に子どもをどうするのか、あるいは地域で子どもは何ができるのかを問い直した本研究は、保育学や教育社会学、災害研究に新たな知見をもたらした。今回の研究成果は、これから東北で行う調査研究につながる内容となった。調査関係者へ論文の郵送を行い、研究責任を果たすとともに、研究成果を広めた。また、熊本大学での震災研究にも寄与した。災害時にいかに日常を取り戻すのか、その過程を分析した本研究は、災害研究に対しても知的インパクトをもたらした。

著書の書評が日本家庭科教育学会および日本教育社会学会に掲載され、各学問領域に影響を及ぼした。また、著書の広告が朝日新聞に掲載され、一般の人々の目にも止まることとなった。また、人文・社会系学部代表として国立大学法人熊本大学より研究業績表彰を受け、所属機関より評価された。

(今後の展望)

高度経済成長期における、東北における生活綴り方運動、生活改良普及事業における農村女性による生活記録等のサークル活動に焦点を当てながら、農村女性が集い、創造的な活動に従事することの意味を分析する。

「学習」を通して得た、生活を客観視し、変革しようとする力が現実の封建的な農村社会と齟齬をきたしつつも、農村女性たちを結びつけ、地域社会にどのような変容をもたらしていったのかを文書資料や統計資料、インタビュー調査のデータから跡付けていく。

東北と九州の農村を対象とし、女性たちの生活/労働における格差(経済格差や嫁と姑の格差)を視野に入れながら、孤独な家事労働、封建的な家、弱い嫁の立場、言葉を持たない(発することのできない)女性たちが分断を乗り越え、農村で生き延びる糧となったネットワークを浮き彫りにしていく。さらに高度経済成長期後半以降、農業や家事労働が機械化し、女性たちの多くが賃労働に従事ようになる中で、サークルはどのように変容しつつも彼女たちの生活に影響を及ぼしていくのか、データから明らかにする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

2014年3月、増田 仁「高度経済成長期における家事労働者形成過程の再検討 家政学的知と実践の社会

学的研究に向けて 』風間書房、
単著、査読無、175 頁。

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ
<http://masuda.her.jp>

2014 年 11 月、増田 仁『高度経済成長
期の農村と女性 さくら市の女性団体
の活動を中心に』（栃木県のさくら市
ミュージアムでの招待講演）氏家喜連
川歴史文化研究会 氏家喜連川
歴史と文化，14，74-77.

2015 年 11 月、増田仁 国立大学法人熊
本大学研究業績表彰

2015 年 11 月、増田仁、佐藤香氏の『高
度経済成長期における家事労働者形成過
程の再検討』の書評に応じて．教育社会
学研究，97，189-190．

6．研究組織

(1)研究代表者

増田 仁 (MASUDA, Megumi)
熊本大学・教育学部・講師
研究者番号：80510560

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：